

山 王 遺 跡 ほか

山王遺跡第206次調査

山王遺跡第211次調査

山王遺跡第213次調査

大日南遺跡第15次調査

令和2年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成30年度と平成31年度に受託事業として実施した4件の発掘調査の成果を収録したものです。中でも山王遺跡では、多賀城南面に広がる平安時代のまち並みのうち、東西大路を挟んだ国守館の南側の区画を調査したところ、東西道路によって区画がさらに南北2つに分けられている状況が明らかとなりました。

広大な遺跡範囲に対し、調査面積はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和2年3月

多賀城市教育委員会

教育長 麻生川 敦

例　　言

- 1 本書は、受託事業による平成30年度に実施した発掘調査1件と平成31年度に実施した発掘調査3件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行なった調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 捜索図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行なった。また、遺物の写真撮影は村松稔、大木丈夫、杉山祐一、小原駿平が行い、本書の編集は大木が行なった。
I：佐藤純平　　II・IV：杉山祐一　　III：大木丈夫　　IV：赤澤靖章
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	山王遺跡第206次調査	3
III	山王遺跡第211次調査	8
IV	山王遺跡第213次調査	38
V	大日南遺跡第15次調査	41

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 小畠 幸彦（平成28年10月1日～令和元年9月30日）
多賀城市教育委員会 教育長 麻生川 敦（令和元年10月1日～）
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤 良彦（平成30年度）
所長 伊藤 文昭（平成31年4月1日～）
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
主幹 武田健市（平成30年度）
副主幹 赤澤靖章 研究員 大木丈夫 杉山祐一 調査員 名取健一
- 4 調査協力者 仙台農業協同組合 株式会社草刈商事 株式会社ホットハウス
東北電力株式会社送配電カンパニー
- 5 調査従事者 阿部和彦 阿部正治 安藤美喜子 内田節子 大山明彦 尾形潤 小貫芳彦
菅野大 工藤正好 佐藤道子 島村純子 菅原富次男 菅原正義 鈴木真由美
鈴木優子 関内久子 漣戸口弘行 漣戸嶋修 但野順子 竹本裕昭 本田雄一
- 6 整理従事者 有路尚子 石垣玲子 浦山紀以子 川名直子 菊池あかね 佐々木直美 佐藤里美
千葉貴久江 秦千尋 堀川紀子 宮城ひとみ

調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	山王遺跡第206次	多賀城市南宮字伊勢70番外11筆	平成31年3月5日～3月7日	125m ²	武田・名取
2	山王遺跡第211次	多賀城市山王字山王三区45番1外	令和元年6月17日～11月28日	435m ²	大木
3	山王遺跡第213次	多賀城市山王字西町浦10番外6筆	令和元年6月19日～7月25日	225m ²	赤澤
4	大日南遺跡第15次	多賀城市高橋字大日北110番4外	平成31年4月12日～4月18日	125m ²	杉山

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 壁穴住居跡 S K : 土壙
ピット (P) : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構

- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。

(1) 土師器坏

A類 : ロクロ調整を行わないもの

B類 : ロクロ調整を行ったもの

　B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

　B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

　B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

　B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

　B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

(2) 土師器甕

A類 : ロクロ調整を行わないもの B類 : ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器坏

I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

- 3 本文中で用いている「灰白色火山灰」とは、東北地方に広く降下した広域火山灰である。その降下年代に関しては、915年とする説（町田洋「火山灰とテフラ」日本第四紀学会編『日本第四紀地図』1987年、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』、1991年）と、907年から934年の間とする説（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』、1998年）に見解が分かれている。前者は『扶桑略記』（裏書）延喜15年（915）7月13日条の「出羽国言上、雨灰高二寸、諸郷桑枯損之由」の記事を火山灰降下記事とする理解である。後者はこの火山灰が、907年伐採の木材を使用している秋田県払田柵跡外郭線C期角材列の存続中に降下していることから907年を上限とし、承平4年（934）に焼失した陸奥国分寺七重塔（『日本紀略』同年閏正月15日条）の焼土層に覆われていることから934年を下限とする説である。近年、915年説を評価するものも見られる（小口雅史「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山（長白山）を中心に—」、笹山晴生編『日本律令制の展開』吉川弘文館、2003年）。本書では、これらの研究成果をもとに、10世紀前葉に降下したものと理解する。

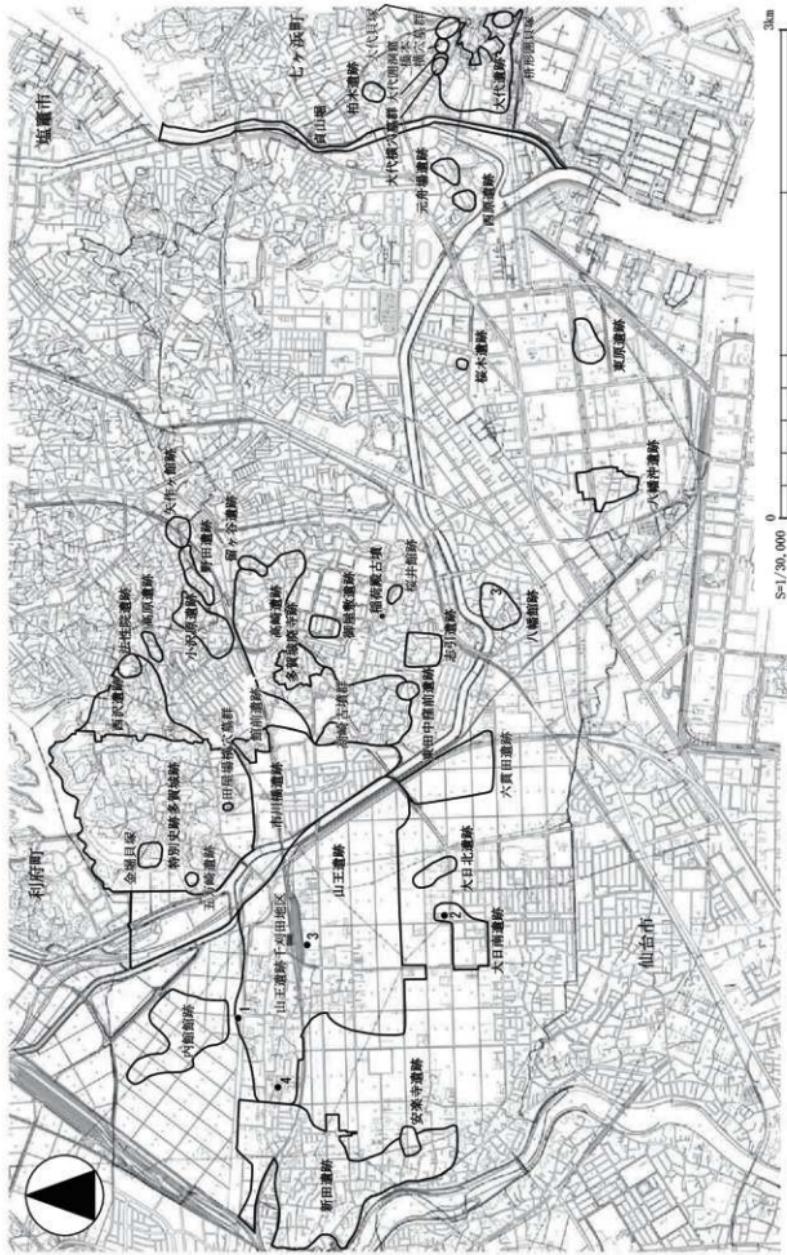
I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

大日南遺跡は、標高3mほどの沖積地に立地している。これまでの調査では、中世を中心とする武士の屋敷跡が発見されており、新田遺跡と同様に八幡庄との関連が示唆される。



第1図 調査地点の位置

1：山王遺跡第206次調查 2：大日南遺跡第15次調查 3：山王遺跡第211次調查

4：山王遺跡第213次調查

II 山王遺跡第206次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮宇伊勢地先におけるJA仙台機械化センター新築工事に伴う本発掘調査である。平成30年10月12日に事業者より当該地における機械化センター建設と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。その計画は、農機センター・農機具格納庫、油庫、農機洗浄棟の建物3棟の建設及び防火水槽の設置であった。工事の内容としては、現地表面から1.5mの盛土を行い、建物の基礎工事として約29mの深さまで柱状改良をするものであった。当該地では、確認調査として平成26年度に第145次調査を実施しており(多賀城市教育委員会2015)、主に古代の遺構・遺物を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。協議の結果、計画どおり工事を実施せざるをえないと判断されたことから、平成31年2月6日に事業者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受け、発掘調査を実施することとなった。

本調査範囲については、第145次調査の成果を踏まえ、農機センター等建設計画地内で、古代の溝跡が発見された6・7区の延長上にトレンチを設定した。

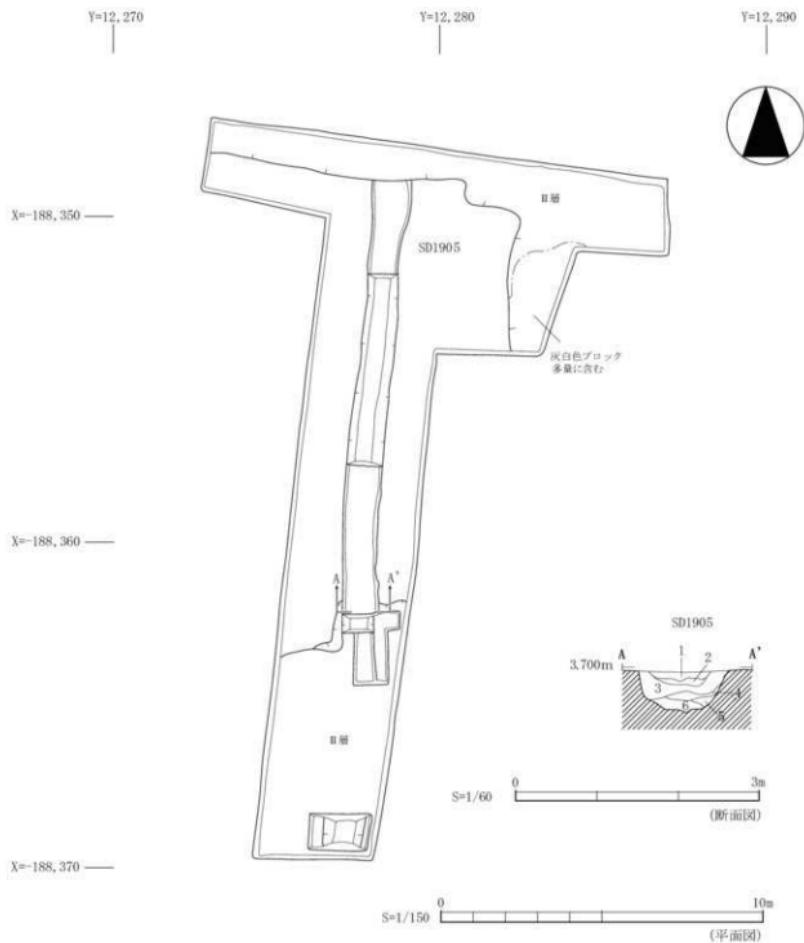
はじめに、3月5日に重機による表土除去を行い、第145次調査で発見していた溝跡の続きを確認した。続いて、作業員による遺構の確認、掘削を行った。写真撮影後、遺構の平面図・断面図を作成し、3月7日までに現場作業のすべてを終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



第3図 調査区平面図・断面図

2 調査成果

(1) 基本層序

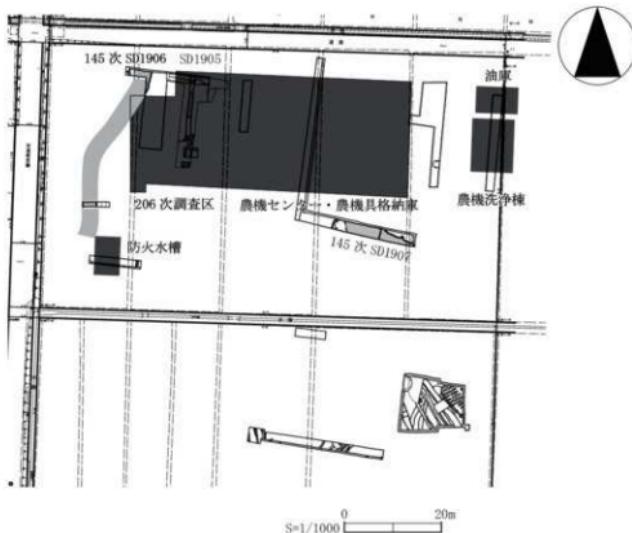
今回の調査区では、以下の堆積層を確認した（第145次調査参照）。

I層：現代の盛土層及びそれ以前の水田耕作土。

II層：黄褐色砂質土が多量に混入する黒褐色砂質土。

III層：黒褐色粘質土。

IV層：灰オーリーブ砂質土。古代の遺構検出面。



第4図 第145・206次調査区配置図

(2) 発見遺構と遺物

SD 1905 溝跡（第3図）

【調査状況】確認調査時（第145次調査）に、北側の6区SD 1905と南側の7区SD 1922は位置関係、方向、規模から同じ溝跡と推測されていた。今回の調査でそれが正しいことが確認されたことから、名称についてはSD 1905を使用する。

【形状・規模】南北方向に走る溝で、第145次調査の結果を含めると全体で約21mを検出した。平面の上幅は約1.1m、断面上の深さは約50cmである。壁は急角度で立ち上がり、底面はやや丸く窪む。

【埋土】6層に分けられる。すべて褐色の粘質土層である。1層は褐色で暗色土ブロックを多量に含む。窪みに堆積したⅢ層土と考えられる。2・4層は混入物が少ない。3層は淡黄橙色土を多量に含み、灰白色火山灰ブロックをわずかに含む。5層は褐色土で、砂質土と黒色ブロックを含む。6層は5層と同様だが、砂質土は含まない。

【遺物】ごく少量の土器片が出土した。

3 まとめ

今回の調査では、第145次調査で報告されたSD 1905・1922溝跡の続きを確認した。年代を決定する資料は得られなかったが、第145次調査でⅢ層直下の遺構は10世紀前葉頃を下限とすることが確認されていることや、今回の調査区内からわずかながら古代の土器片が出土していることから、おそらくは古代の溝と考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会「VI 山王遺跡第145次調査」『多賀城市内の遺跡2—平成26年度発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第119集 2015



S D 1905溝跡検出状況（南から）



S D 1905溝跡断面（北から）

III 山王遺跡第211次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王三区地内における共同住宅建設に伴う本発掘調査である。平成31年4月2日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、事業地内において、現地表面から1m盛土と30cmの切土を行い、286箇所に最大13.16mの深さの杭工事を実施するものである。当該地では、平成5年度に第23次調査を行っており、深さ20cmの所で古代の道路跡、溝跡、遺物が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。

このため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された工法以外には十分な地盤強度を得られないことから、発掘調査を実施することになった。このことから、令和元年5月31日に事業者から発掘調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、6月17日から発掘調査に着手した。

はじめに重機による表土の掘削を行い、現地表面から20cmから60cmの所で遺構を確認した。7月1日から作業員による遺構確認作業を開始した。

そして、1面目の遺構の掘削、測量の実施後、ドローンによる空撮を行った。その後、2面目も1面目同様調査を行い、遺構の掘削、測量した後、11月28日にドローンによる空撮を行い、翌日、器材を撤収し、現地調査のすべてを終了した。



第1図 方格地割と調査区の位置

2 調査の成果

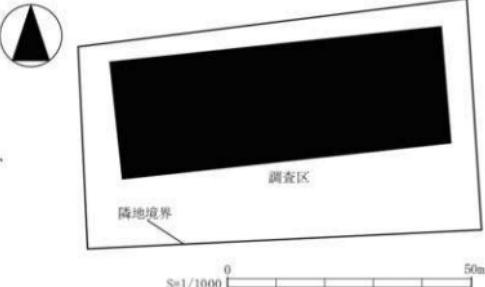
(1) 層序

I層：現代の盛土層で、厚さ約30～60cmである。

II層：黄灰色（2.5Y6/1）の砂質土。この層の上面は、古代の1面目の遺構検出面で、厚さ約20cmある。

III層：オリーブ黄色（5Y6/3）の砂質土。この層の上面は、古代の2面目の遺構検出面で、厚さ約20～30cmある。

IV層：灰色（5Y4/1）の砂質土で、厚さ約30cmある。



第2図 調査区配置図

(2) 発見した遺構

1 道路跡

【S X2708東西大路南1間道路跡】(第4・5図)

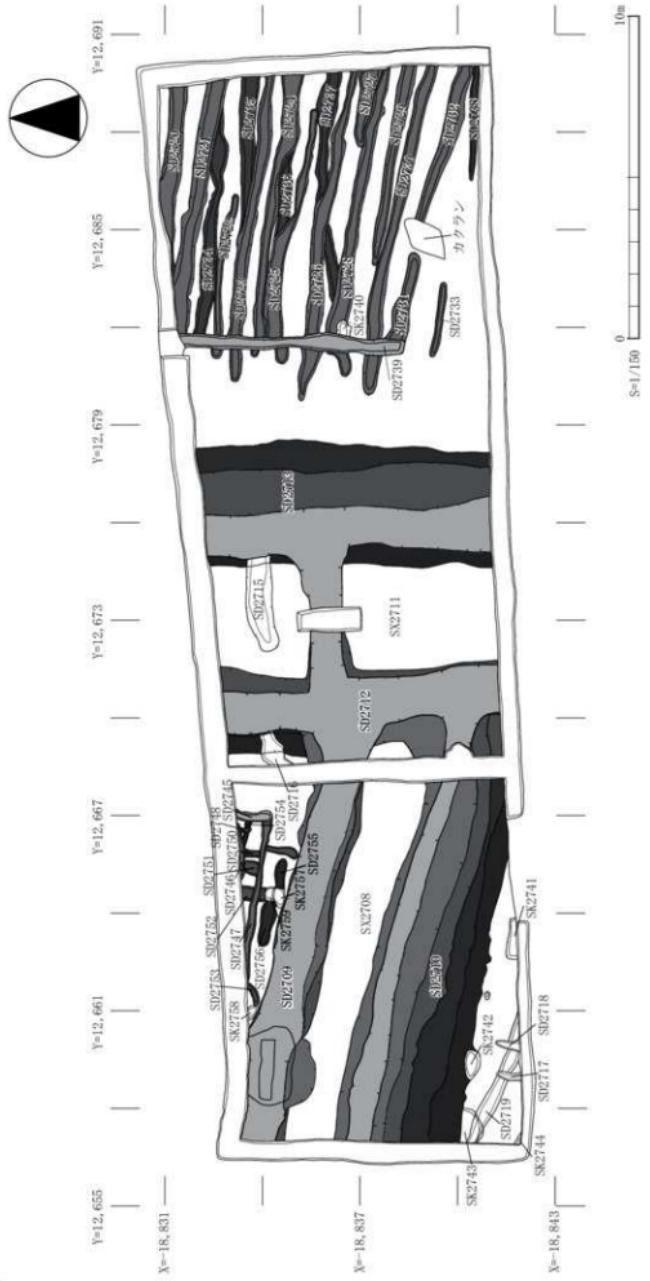
調査区西北部に位置する。III層上面で3期（A～C期）、II層上面で2期（D・E期）確認している。南北に素掘りの側溝を伴う東西道路である。この道路跡の東側には、西7道路（南北道路）が存在するが、西7道路の西側溝により切られている。道路北西は、調査区外にあるため、長さは不明である。最終期の道路幅（側溝心々間）は約3.0mある。それ以外の時期は、道路の南側と南側溝との境が新しい時期に造られた側溝によって壊されているため、規模は把握できない。路面堆積層は確認されなかった。遺物は、小片のため図示していないが、土師器坏・甕・須恵器坏・甕の破片が出土している。

A期：南側溝（SD2710a）を確認した。北側溝は、同時期のものは確認できなかった。III層上面で確認した幅は約80cm～1mあるが、南側溝の北側が、新しいb期の側溝により壊されているため、側溝の幅は不明である。深さは、遺構確認面から約60cmあり、埋土は6層に分層され、自然堆積であった。遺物は、土師器坏（B V類）・甕・須恵器坏・甕・瓶等が出土している。

B期：南側溝（SD2710b）を確認している。北側溝は、同時期のものは確認できなかった。遺構北側は、当該側溝c期により壊されている。そのため、幅は不明である。深さは、遺構確認面から約70cmほどある。埋土は7層に分層され、自然堆積層である。遺物は、土師器坏（B II類）や須恵器瓶が出土している（第9図）。

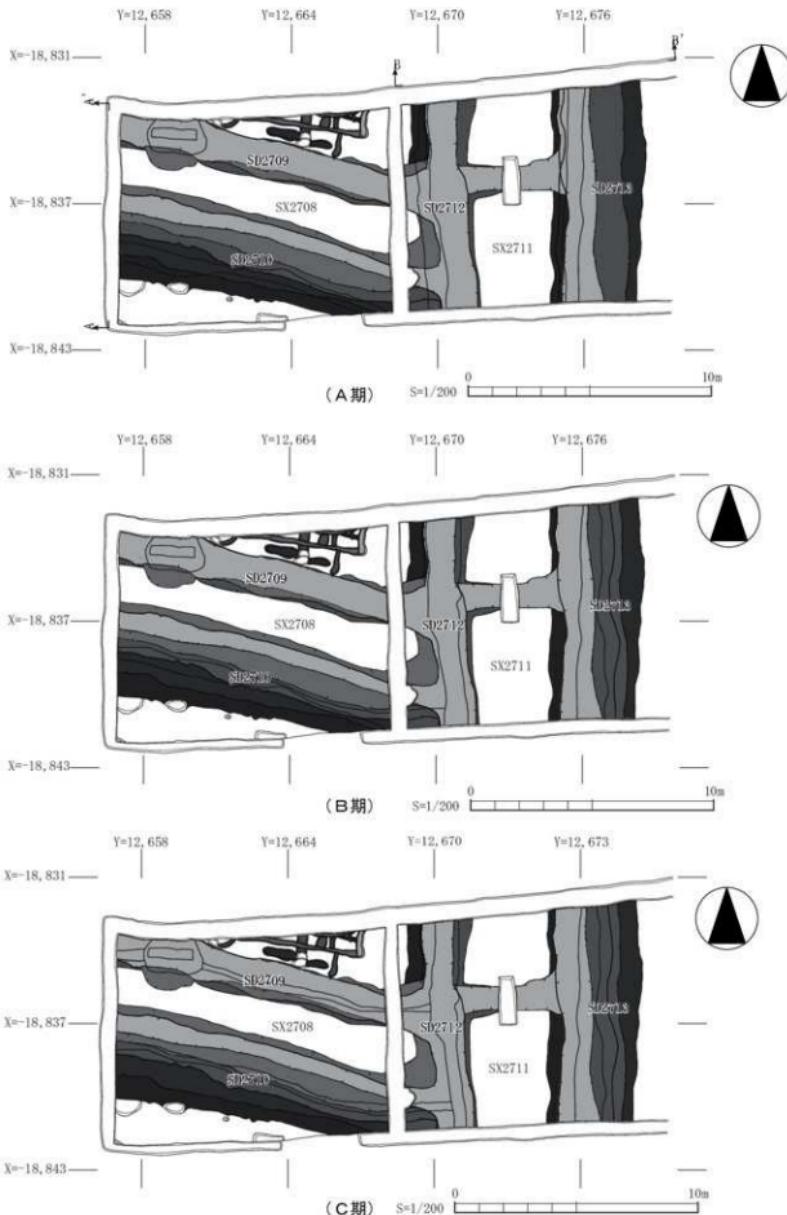
C期：南側溝（SD2710c）、北側溝（SD2709a）を確認した。南側溝は、遺構北側が当該遺構のd期によって壊されているため、溝跡の幅は不明である。深さは、遺構確認面から約70cmある。埋土は、自然堆積であり、3層に分層される。出土遺物は、土師器坏・甕・須恵器坏・瓶・長頸瓶（第12図）などが出土している。北側溝は、遺構北側から中央部分を当該遺構b期により壊されている。側溝の幅は、残されているところで、幅約1.7m、深さ約60cmある。埋土は、自然堆積であり、2層に分層される。遺物は、土師器坏（B II類）・甕・須恵器小瓶・須恵器系土器坏などが出土している（第8図）。

D期：南側溝（SD2710d）、北側溝（SD2709b）ともに確認している。これらの側溝は、II層上面

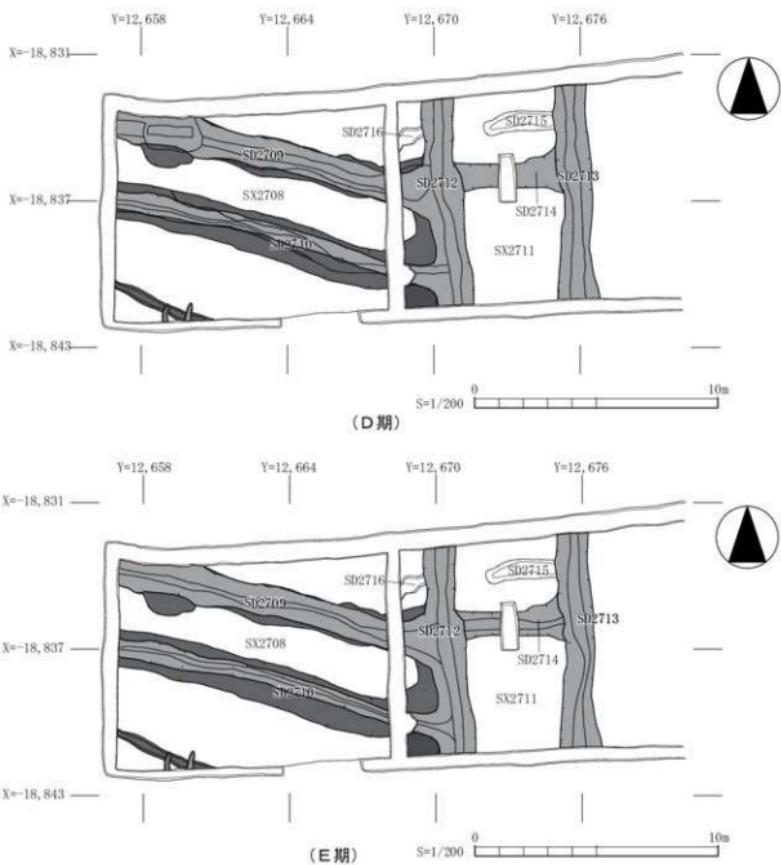


第3図 遺構配置図

実際には、上面と下面の差構は同一の面で検出できない。この図は、上面と下面の差構を投影したものである。
※1 SD2709/2710/2712/2713号 ■：b面 ■：c面 ■：d面 ■：e面が上面の差構である。



第4図 東西大路南1間道路跡・西7道路跡平面図（A～C期）



第5図 東西大路南1間道路跡・西7道路跡平面図（D・E期）

で検出した。南側溝は、C期より北側に位置をずらして確認した。遺構の中央部分を当該遺構E期により壊されている。幅は約2m10cmあり、深さは、遺構確認面から約45cmであった。埋土は2層に分層され、自然堆積層であった。上層には、灰白色火山灰が多量に堆積していた。出土遺物は、須恵器壺、須恵系土器壺、灰釉陶器皿などが出土している（第13図）。北側溝は、C期よりも北側に位置している。さらに遺構の中央部をE期により壊されているため、幅は確認できない。検出した遺構の北西側で、側溝の底面より、一段深く掘られた場所があった。側溝の深さは、遺構確認面から約70cmある。埋土は2層に分層され、自然堆積層であった。出土遺物は土師器壺、甕などが出土している（第9図）。

E期：南側溝（S D2710 e）、北側溝（S D2709 c）を確認した。両側溝とともにII層上面で確認した。南側溝は、D期の上面に幅を狭めて検出した。幅約80cm～1m20cm、深さ約40cmあり、埋土は自然堆積で2

層に分層された。断面図にはないが、遺構検出した際には、方格地割廃絶時に堆積した黒色粘土に覆われていた。出土遺物は、土師器壺（B II類）等が出土している（第14図）。北側溝は、E期の同遺構上に幅を狭くして、検出している。幅約1m～1m20cm、深さ約40cmあり、埋土は自然堆積であり、4層に分層された。1層目は、方格地割廃絶時に堆積した黒色粘土層で覆されていた。出土遺物は、縁袖陶器の合子の破片が出土している（第9図4）。

【S X2711西7道路跡】（第4・5図）

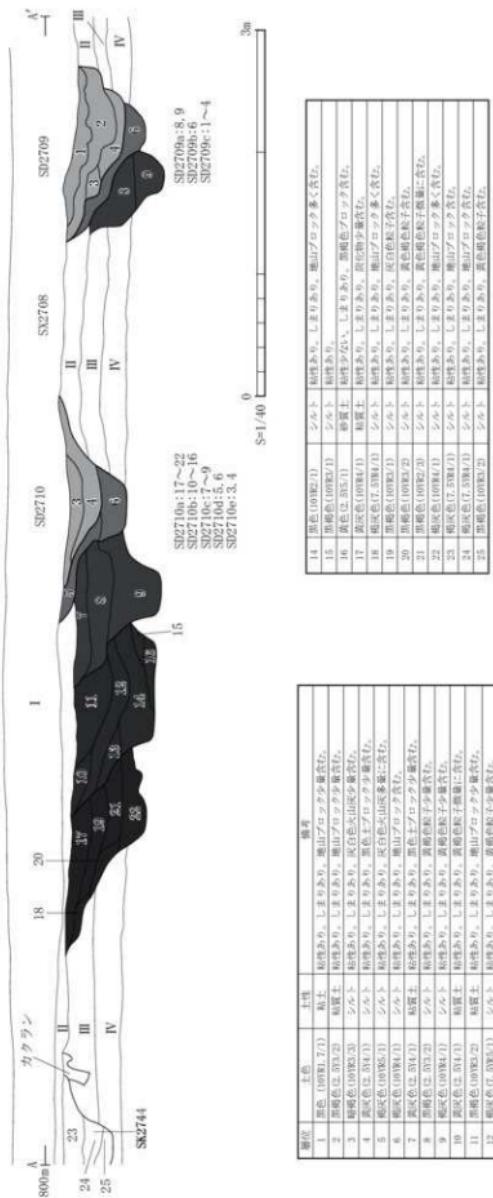
調査区中央部に位置する。III層上面で3期（A～C期）、II層上面で2期（D・E期）確認している。東西に素掘りの側溝を伴う南北道路である。この道路跡の西側には、東西大路南1間道路（東西道路）が存在する。道路北側、南側ともに調査区外にあるため、長さは不明である。最終期の道路幅（側溝心々間）は約5.5～6.0mある。それ以外の時期は、両側の側溝が新しい時期に造られた側溝によって壊されているため、規模は把握できない。路面堆積層は確認されなかった。調査区中央部や北側に道路跡を横切っているSD2714がある。

A期：西側溝（SD2712a）、東側溝（SD2713a）を確認した。両側溝ともに、III層上面で確認した。西側溝の幅は、側溝の東側が、新しい側溝により壊されているため、側溝の幅は不明である。深さは、遺構確認面から約70～80cmあり、埋土は6層に分層され、自然堆積であった。遺物は須恵器壺（B V類）等が出土している。東側溝の幅は、側溝の東側が、新しい側溝により壊されているため、側溝の幅は不明である。深さは、遺構確認面から約65～80cmあり、埋土は4層に分層され、自然堆積であった。遺物は小片のため図示していないが、土師器壺（B V類）、甕、須恵器壺、甕等が出土している。

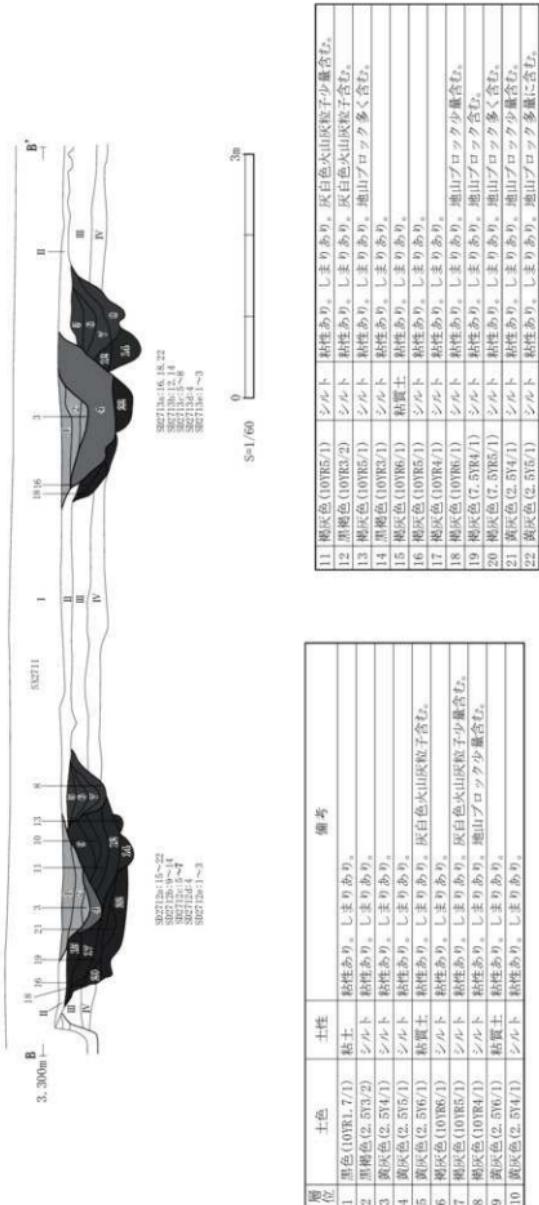
B期：西側溝（SD2712b）、東側溝（SD2713b）を確認している。両側溝ともに、III層上面で確認している。西側溝は、遺構上面を掘りなおされた側溝b・c期により壊されている。そのため、幅は不明である。遺構底面は、遺構確認面から約90cmほどにある。埋土は5層に分層され、自然堆積層である。遺物は、小片のため図示していないが、土師器壺、甕、須恵器壺、甕などが出土している。東側溝も、遺構上面を掘りなおされた側溝b・c期により壊されている。そのため、幅は不明である。遺構底面は、遺構確認面から約90cmほどにある。埋土は自然堆積で、2層に分層される。出土遺物は、須恵器壺、須恵系土器が出土している（第18図）。

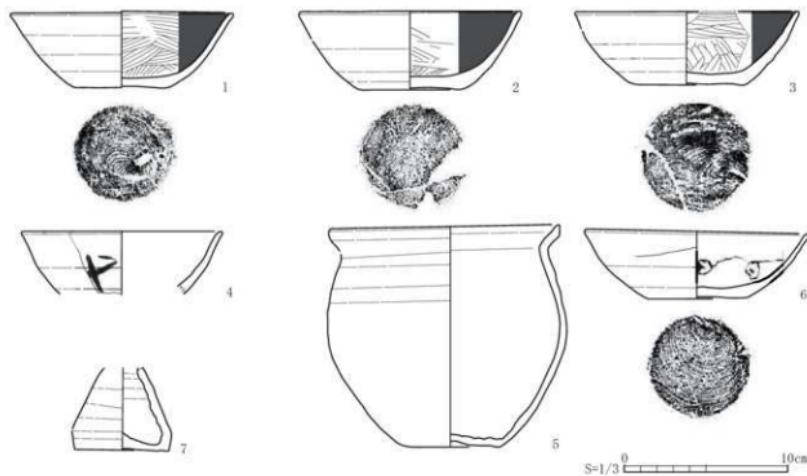
C期：西側溝（SD2712c）、東側溝（SD2713c）を確認した。III層上面で確認している。西側溝は、遺構西側が当該遺構のE期によって壊されているため、溝跡の幅は不明である。深さは、遺構確認面から約50cmある。埋土は、自然堆積であり、4層に分層される。出土遺物は小片のため図示していないが、須恵系土器壺などが出土している（第17図）。東側溝は、遺構西側を当該遺構B期により壊されている。そのため、側溝の幅は不明である。深さは遺構確認面から約65cmある。埋土は、自然堆積であり、4層に分層される。出土遺物は、土師器壺（B II類）、須恵器壺（V類）、瓶などが出土している（第19図）。

D期：西側溝（SD2712d）、北側溝（SD2713d）とともに確認している。これらの側溝は、II層上面で検出した。西側溝は、上面もしくは遺構東側を当該遺構E期により壊されている。そのため、幅は不明である。遺構底面は、確認面から深さ約50cmにあった。埋土は1層で自然堆積層であった。出土遺物は、小片のため図示していないが、土師器壺等が出土している。東側溝は、C期よりも西側に位置している。さらに遺構の中央部をE期により壊されているため、幅は確認できない。側溝の底面は、遺構確認面か



第6図 S X2708・SD2709・SD2710 断面図

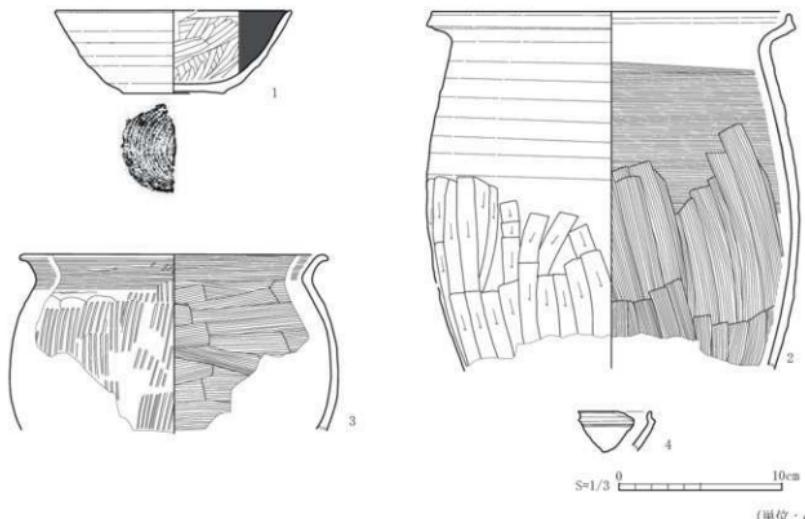




(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 坏	SD2709a	ロクロナデ 底部:回転糸切り→手持ちヘ ラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	14.6 16/24	6.0 24/24	4.7	3-5	R1	BII類
2	土師器 坏	SD2709a	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理 一部摩滅	13.6 6/24	6.4 24/24	4.8	3-6	R2	BV類
3	土師器 坏	SD2709a	ロクロナデ 底部:回転糸切り→手持ちヘ ラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(13.6) 2/24	6.6 24/24	4.5	3-7	R3	BII類
4	土師器 坏	SD2709a	ロクロナデ、墨書き	摩滅してみえず。	(12.2) 4/24	-	-	-	R5	
5	土師器 甕	SD2709a	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8) 12/24	6.0 24/24	13.5	4-1	R7	B類
6	須恵系土器 坏	SD2709a	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.6) 23.5/24	6.0 24/24	4.1	3-8	R24	
7	須恵器 小瓶	SD2709a	ロクロナデ	ロクロナデ →体部下部ヘラケズリ	-	7.6 18/24	-	-	R25	

第8図 SD2709北側溝 C期 出土遺物



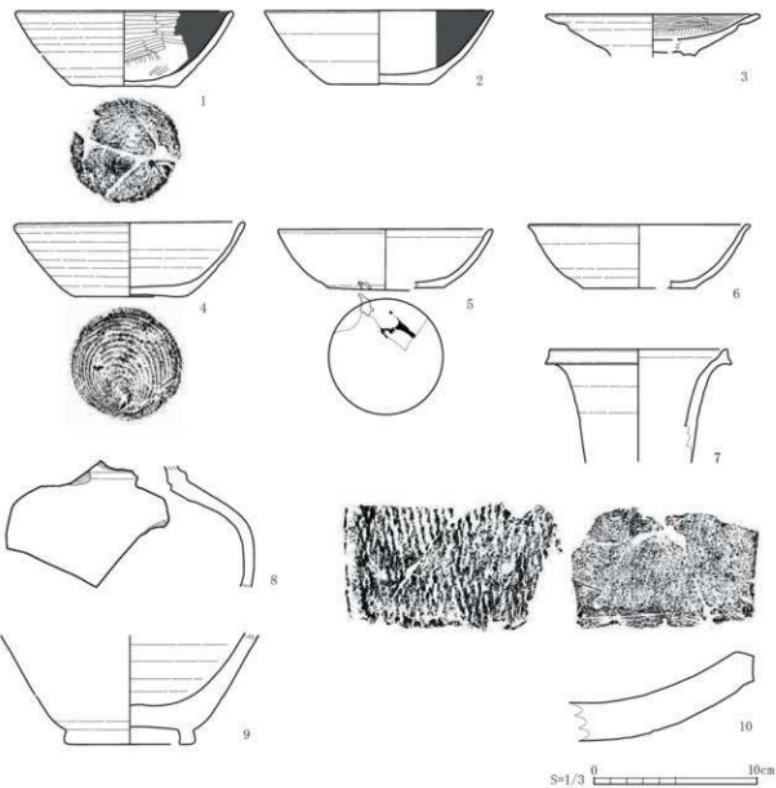
(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 壺	SD2709b	ロクロナデ 底部: 回転系切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.4) 2/24	(3.2) 12/24	5.1	—	R4	BV類 D期
2	土師器 甕	SD2709b	口縁部: ロクロナデ 体部: ヘラケズリ	口縁部: ロクロナデ 体部: ハケメ→ヘラナデ	(21.8) 18/24	—	—	—	R6	D期
3	土師器 甕	SD2709b	口縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラナデ	(18.5)	—	—	—	R8	D期
4	縄袖陶器 合子	SD2709c	ヘラミガキ→施釉	口縁部: ヘラミガキ ロクロナデ→施釉	—	—	—	3-4	R9	旅投窓産と推定 E期

第9図 SD2709北側溝 D・E期 出土遺物

ら約70cmある。埋土は1層で、自然堆積層であった。出土遺物は小片のため図示していないが、土師器壺、甕などが出土している。

E期: 西側溝(SD2712e)、東側溝(SD2713e)を確認した。両側溝とともにII層上面で確認した。西側溝は、D期の上面に検出した。幅約1m20cm、深さは遺構確認面から約40cmあり、埋土は自然堆積で2層に分層された。上層は方格地剖廃絶時に堆積した黒色粘土層に覆われていた。出土遺物は、小片のため図示していないが土師器壺、甕、須恵器壺、甕、須恵器系土器壺等が出土している。東側溝は、E期の同遺構上に幅を狭くして、検出している。幅約40cm~60cm、深さは遺構確認面から約40cmあり、埋土は自然堆積であり、4層に分層された。1層目は、方格地剖廃絶時に堆積した黒色粘土層で覆われていた。遺物は砾石が出土している(第20図)。



第10図 SD2710南側溝 A期 出土遺物

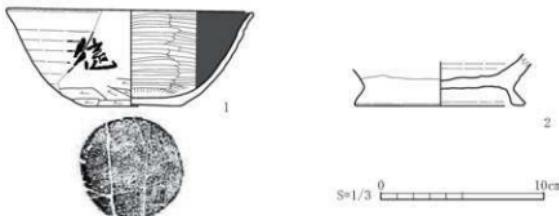
【SD2714溝跡】(第21図)

調査区中央部、S X2711西7道路跡上で検出している。II層上面で検出している。この溝は方格地割廃絶時の黒色の粘土層に覆われているため、西7道路のE期には機能していたと考えられる。幅約1m～1m20cmあり、深さは遺構確認面から約60cmある。埋土は3層あり、自然堆積である。出土遺物は、23次調査時に土師器壺(BV類)が出土している(第22図)。

SD2710 A期

(単位: cm)

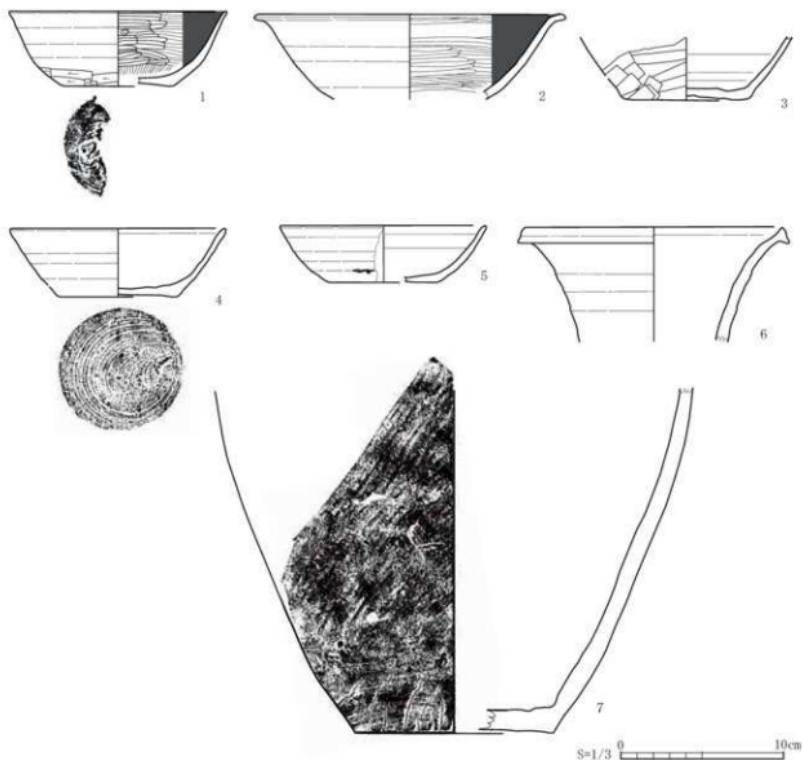
番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 坏	SD2710a	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部: 回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	13.6 10/24	6.6 23/24	4.65	4-2	R28	BII類
2	土師器 坏	SD2710a	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理 摩滅	(14.0) 7/24	6.2 24/24	4.5	—	R29	BII類
3	土師器 高台付皿	SD2710a	ロクロナデ 底部: 回転糸切り→高台貼付け	ヘラミガキ	(13.0) 5/24	—	—	—	R31	黒色処理なし。
4	須恵器 坏	SD2710a	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	14.0 19/24	6.8 24/24	4.55	4-4	R33	V類
5	須恵器 坏	SD2710a	ロクロナデ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ	(13.1) 12/24	(7.2) 5/24	3.75	4-5	R34	III類
6	須恵器 坏	SD2710a	ロクロナデ 底部: 回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 5/24	(7.0) 4/24	3.9	—	R62	III類
7	須恵器 長頸瓶	SD2710a	ロクロナデ	ロクロナデ	(10.8) 5/24	—	—	—	R61	
8	須恵器 長頸瓶	SD2710a	ロクロナデ		—	—	—	—	R39	大戸窯産と推定。
9	須恵器 瓶	SD2710a	ロクロナデ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ	— 18/24	(5.8) —	—	—	R37	
10	瓦 平瓦	SD2710a	布目	溝目痕	—	—	—	—	R58	



(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 坏	SD2710b	ロクロナデ→ヘラケズリ、墨書 底部: 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(15.0) 14/24	6.1 24/24	5.9	4-3	R27	BII類 墨書
2	須恵器 瓶	SD2710b	ロクロナデ	ロクロナデ	— 24/24	7.2	—	—	R19	

第11図 SD2710南側溝 B期 出土遺物



第12図 SD 2710南側溝 C期 出土遺物

2 溝跡

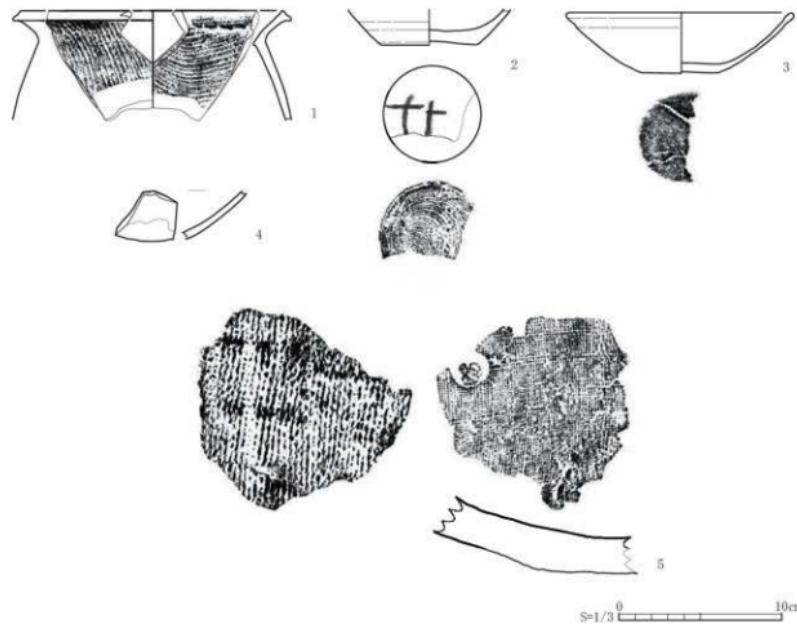
【S X2745小溝群】(第23図)

調査区北側の中央よりやや西側で検出した。Ⅲ層上面で確認した遺構である。小溝の方向と重複関係から新しい順にA群のSD2745、B群のSD2746・2747、C群のSD2748・2749・2750・2751・2752・2753、D群のSD2754・2755・2756である。A群の溝跡は南北方向、B群の溝跡は東西方向、C群の溝跡は南北方向、D群の溝跡は東西方向である。C群のSD2755は、SK2757に切られており、SD2755の方が古い。また、C群のSD2756はSK2759に切られており、SD2756の方が古い。長さはSD2747が最もよく残っており、4m20cmほど残っているが、東端はSD2745によって壊されている。深さは、SD2756が最も深く約15cmであった。埋土は、黄灰色や黒褐色の粘質土で、すべて単層であった。

SD2710-C期

(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 壺	SD2710c	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部:回転糸切り→手持ちヘ ラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 5/24	(7.0) 8/24	4.6	—	R52	BV類
2	土師器 壺	SD2710c	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(18.6) 5/24	—	—	—	R30	BI類
3	土師器 甕	SD2710c	ロクロナデ→ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	ロクロナデ	—	7.8 24/24	—	—	R32	B類
4	須恵器 壺	SD2710c	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.1) 12/24	7.2 5/24	3.75	—	R35	V類
5	須恵器 壺	SD2710c	ロクロナデ 底部:回転ヘラ切り	ロクロナデ	(12.5) 4/24	(6.8) 3/24	3.5	—	R18	III類
6	須恵器 広口瓶	SD2710c	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	—	R38	
7	須恵器 甕	SD2710c	ロクロナデ→上部タタキ 下部ヘラケズリ	ロクロナデ	—	(12.2) 12/24	—	—	R36	

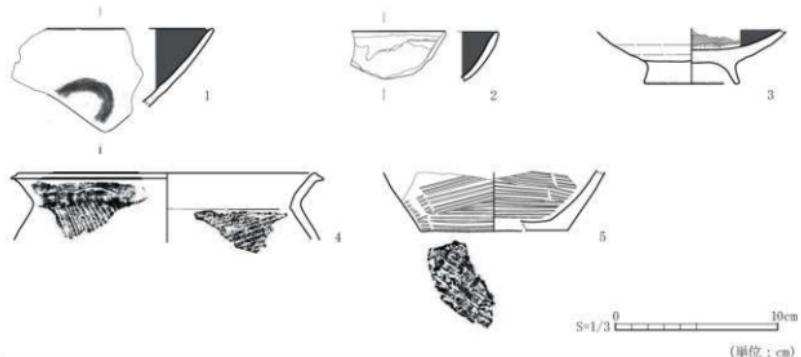


第13図 SD2710南側溝 D期 出土遺物(下層)

SD2710-D期

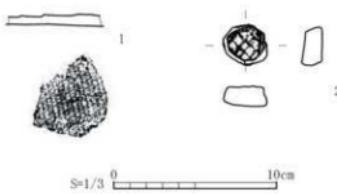
(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 甕	SD2710d	口縁部:ヨコナデ ハケメ	ハケメ	(16.1) 2/24	—	—	—	R59	
2	須恵器 环	SD2710d	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	6.0 19/24	—	—	R15	V類 底部墨書き
3	須恵系土器 环	SD2710d	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.8) 6/24	(4.8) 18/24	3.7	—	R14	
4	灰釉陶器 碗	SD2710d			—	—	—	—	R17	東濃産と推定。
5	瓦 平瓦	SD2710d	布目	繩目	—	—	—	—	R58	



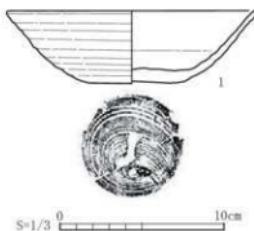
番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 甕	SD2710e	ロクロナデ、墨書き	ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—	—	R11	
2	土師器 环	SD2710e		ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—	—	R12	BII類 内面全体に付着物
3	土師器 高台付环	SD2710e	ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	—	(3.2) 20/24	—	—	R13	
4	土師器 甕	SD2710e	口縁部:ヨコナデ ハケメ	ハケメ	(10.4) 2/24	—	—	—	R59	
5	土師器 甕	SD2710e	ハケメ 底部:竪状圧痕	ハケメ	—	(9.0) 6/24	—	—	R56	

第14図 SD2710南側溝 E期 出土遺物



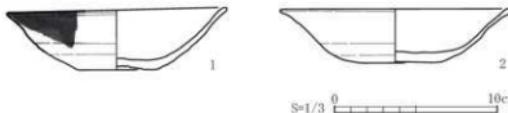
番号	種類	出土遺構	特徴	(単位: cm)		参考
				写真 図版	登録 番号	
1	土器器 甕	SX2711	底部: 箱状圧痕	—	R55	
2	土器片製円板	SX2711	長さ 2.4cm 幅2.7cm 厚さ1.3cm	—	R47	須恵器甕の転用

第15図 S X2711西7道路跡 出土遺物



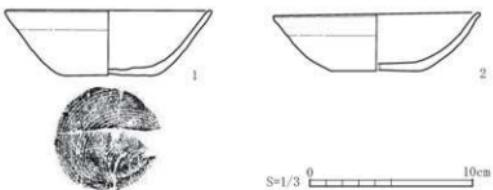
番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	参考
			外面	内面						
1	須恵器 甕	SD2712a	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	15.1 8/24	6.1 22/24	4.4	4-6	R40	V類

第16図 S D2712西側溝 A期 出土遺物



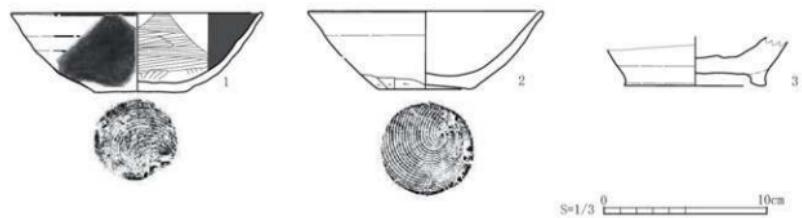
番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	参考
			外面	内面						
1	須恵系土器 甕	SD2712c	ロクロナデ、油煙力?	ロクロナデ	13.4 18/24	4.8 24/24	3.65	4-7	R20	
2	須恵系土器 甕	SD2712c	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	14.1 13/24	6.4 24/24	3.3	—	R21	

第17図 S D2712西側溝 C期 出土遺物



番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 坏	SD2713b	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.6) 3/24	(5.8) 9/24	4.0	—	R44	V類
2	須恵系土器 坏	SD2713b	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.6 21/24	(5.5) 8/24	3.5	—	R42	

第18図 SD2713東側溝 B期 出土遺物



番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 坏	SD2713c	ロクロナデ、油煙 底部：回転糸切り	～ラミガキ→黒色処理	(14.0) 4.5/24	(5.5) 24/24	4.4	—	R41	BII類
2	須恵器 坏	SD2713c	ロクロナデ～ヘラケズリ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.4) 2/24	(5.25) 24/24	4.8	—	R43	II類
3	須恵器 瓶	SD2713c	高台貼付け→ロクロナデ	—	—	(6.2)	—	—	R46	大戸窯産と推定 楕状の焼台の痕跡あり

第19図 SD2713東側溝 C期 出土遺物



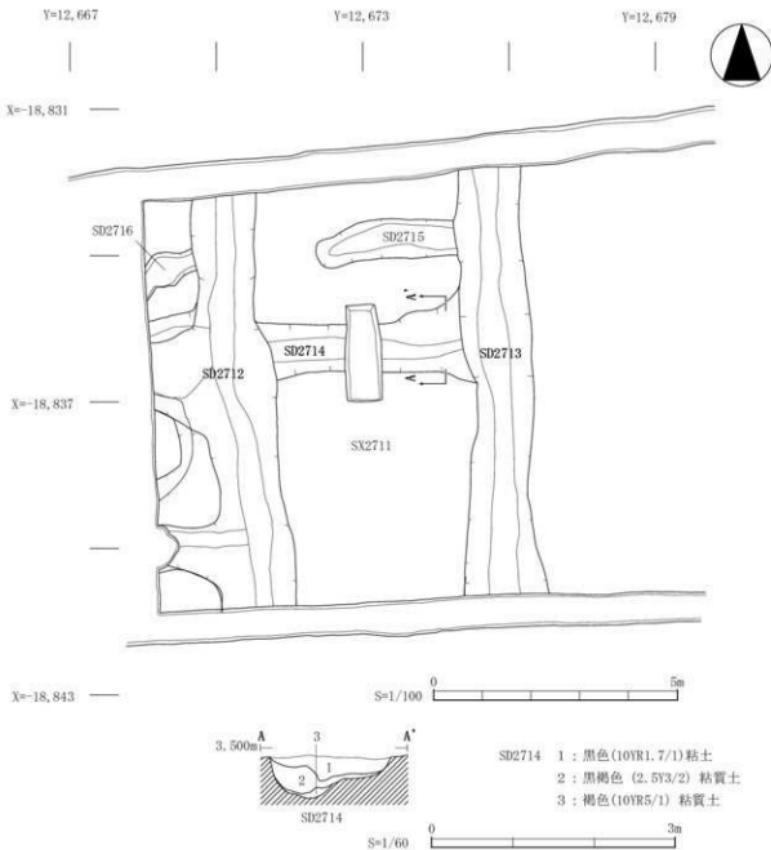
第20図 SD 2713東側溝 E期 出土遺物

【S X2720小溝群】(第24図)

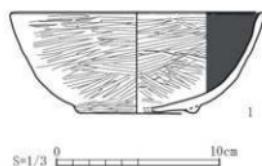
調査区西側で検出した。III層上面で確認した遺構である。小溝の方向と重複関係から新しい順にA群のSD 2739、B群のSD 2720・SD 2721・SD 2722・SD 2723・SD 2724・SD 2725・SD 2726・SD 2727・SD 2728・SD 2729・SD 2730・SD 2731・SD 2732・SD 2733、C群のSD 2734・SD 2735・SD 2736・SD 2738である。A群の溝跡は南北方向、B群の溝跡は東西方向、C群の溝跡は東西方向である。A群の溝は、北側が調査区の外側にあるため、長さは不明である。B・C群の溝は、東側が調査区の外側に延びているため、長さは不明である。深さは遺構確認面から約10～20cmあり、暗黄灰色から黒褐色の粘土が埋土であった。SD 2728はSK 2740に切られているため、SK 2740の方が新しい。そのSK 2740は、SD 2739により切られているため、SK 2740はSD 2728とSD 2739が作られた間の遺構である。出土遺物は、SD 2722・2725から須恵器坏(III類)(第25図1、2)、SD 2726から須恵器甕(第25図3)が出土している。

【S X2717小溝群】(第26図)

調査区南西隅で検出した。II層上面で確認した。小溝の方向と重複関係から新しい順にA群のSD 2717・SD 2718、B群のSD 2719であった。A群の溝は南北方向、B群の溝は東西方向であった。A群の溝跡は、南側が調査区の外側に延びており、長さは確認できなかった。B群の溝跡は、遺構両端が調査区外にあるため、長さは不明である。A群の溝跡は、遺構確認面から深さ約15cm、B群の溝跡は遺構確認面から深さ約20cmであった。埋土はA群は黒褐色の粘質土で、B群は灰黄褐色の粘質土であった。



第21図 SD2714・SD2715・SD2716等 平面図・断面図

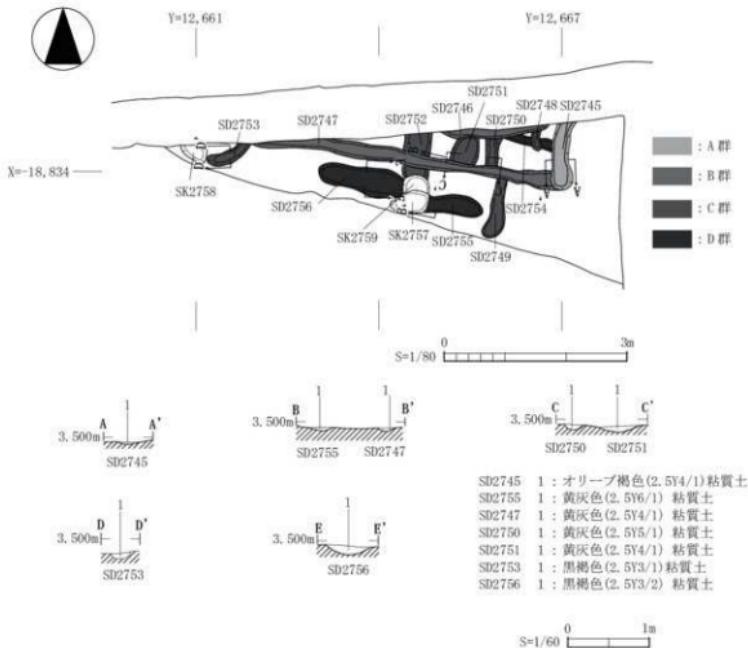


第22図 SD2714出土遺物

SD2714

(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 甕	SD2714	ロクロナデーヘラミガキ 底部:回転系切り	ロクロナデーヘラ ミガキ	(15.6)	(7.2)	6.2	—	R59	V類 第23次調査出土



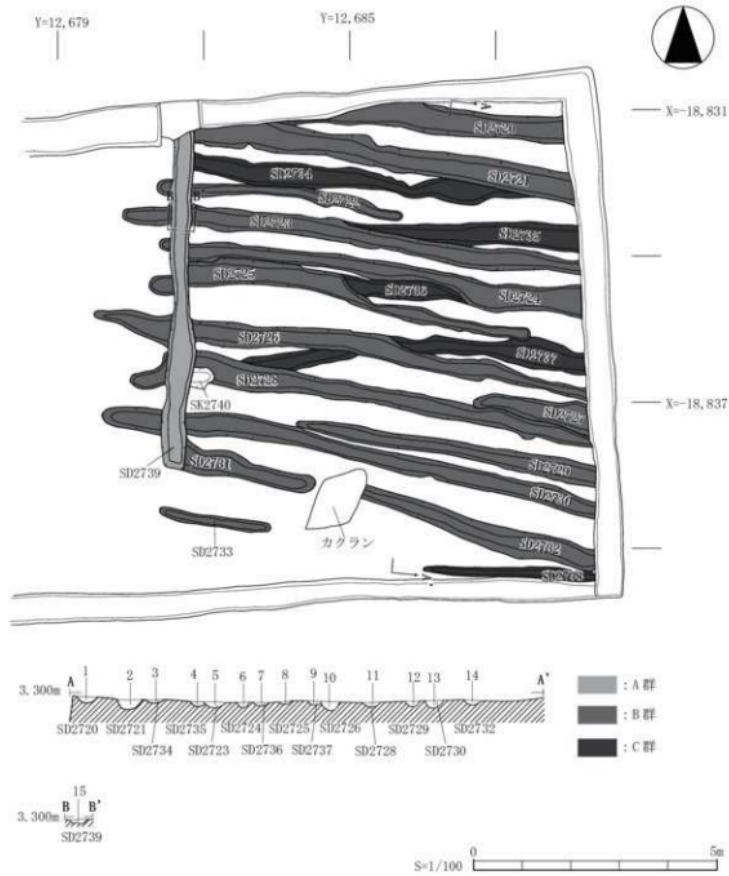
第23図 SD X2745小溝群 平面図・断面図(下層)

【SD2715溝跡】(第21図)

調査区中央部のやや北側、西7道路跡上で検出している。II層上面で発見した。東西方向の溝である。この溝は、方格地剖廃絶時に堆積した黒色粘土で覆われていた。溝の東側は、西7道路跡東側溝に切られている。幅は約80cm、深さは約10cmであった。出土遺物は、小片のため図示していないが、土師器や須恵器が出土している。

【SD2716溝跡】(第21図)

調査区の中央部、西7道路跡の北西部で検出している。II層上面で確認した。東西方向の溝である。溝の東端は、西7道路跡の西側溝に切られている。西端は、第23次調査の排水用の溝によって壊されている。



第24図 S×2739小溝群 平面図・断面図

S X2739小溝群

No	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2720	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
2	SD2721	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
3	SD2734	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
4	SD2735	1	暗青灰(5B3/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
5	SD2723	1	暗青灰(5B3/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック4層より多く含む。
6	SD2724	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
7	SD2736	1	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
8	SD2735	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。灰白火山灰ブロック含む。
9	SD2737	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック8層より多く含む。
10	SD2726	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
11	SD2728	1	黒褐(2.5G3/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
12	SD2729	1	灰黄褐(10YR4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック多く含む。
13	SD2730	1	暗灰黄(2.5Y4/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
14	SD2732	1	黒褐(2.5G3/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。
15	SD2739	1	黒褐(2.5Y3/2)	粘土	粘性あり。しまりあり。古代地山土ブロック含む。

ため、遺構の長さは不明である。幅は50～70cmあり、深さは約10cmである。埋土は、方格地割廃絶時に堆積したと考えられる黒色粘土層の単層であった。

3 土壌

【SK2741土壤】(第27図)

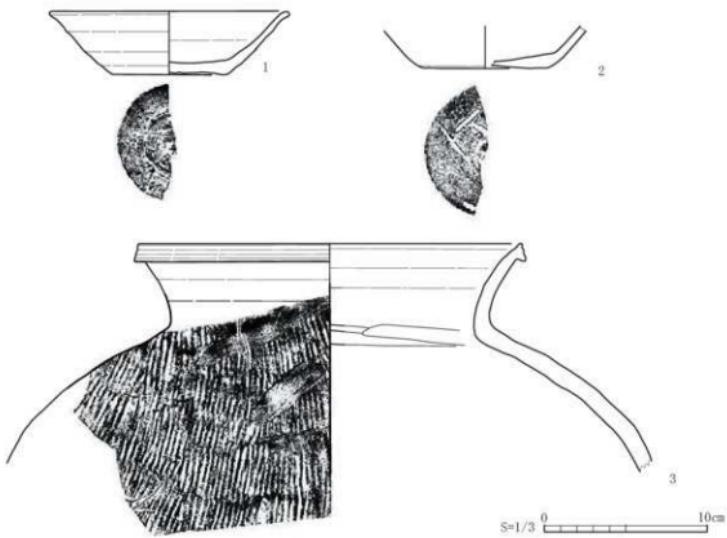
調査区南西部で確認している。III層上面で検出している。遺構南側は調査区外にあるが、検出した平面形からすると、方形をなすものと考えられる。残されている1辺は1.3mあり、深さは遺構確認面から約20cmほどであった。埋土は青灰色の粘質土の単層であった。出土遺物は、小片であるが土師器が出土している。

【SK2742土壤】(第27図)

調査区南西で発見している。III層上面で確認した。平面形は西側に紋り込まれている楕円形である。SD2710a南側溝により壊されているため、それよりも古い遺構である。深さは遺構確認面から約20cmであった。埋土は、黄灰色の粘質土である。

【SK2743土壤】(第27図)

調査区南西で確認している。III層上面で発見している。遺構西側は調査区外にあるが、ほぼ円形をなす土壤であると考えられる。さらに、遺構北側は、SD2710a南側溝により壊されているため、それよりも古い遺構であることがわかる。深さは遺構確認面から約10cmであった。出土遺物は、小片のため図示していないが、土師器壺、甕、瓦などが出土している。



(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 壺	SD2722	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.5) 11/24	(7.0) 3/24	3.9	—	R48	III類 ヘラ書きあり。
2	須恵器 壺	SD2725	ロクロナデ 底部: ヘラ切り	ロクロナデ	— 9/24	(7.9) 9/24	—	—	R53	III類 ヘラ書きあり。
3	須恵器 壺	SD2726	体部: 平行タタキ あて具痕	ロクロナデ	23.6 10/24	—	—	—	R49	

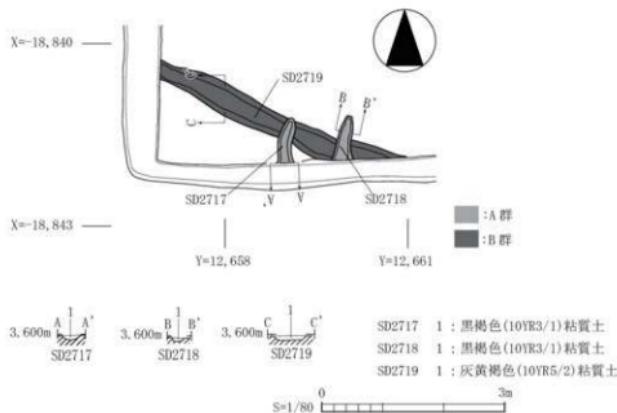
第25図 S X2739小溝群 出土遺物

3.まとめ

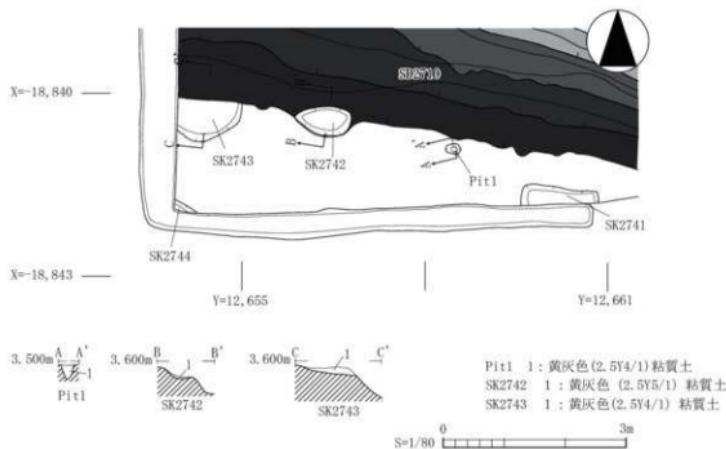
多賀城南面に施行された道路網の内、方格地割の基準となった東西大路と交差する西7道路跡とそれに平行する東西大路南1間道路を検出した。つまり、西7道路と東西大路南1間道路の交差点を調査したことになる。

まず、道路跡の検討をする。これまでの調査では、今回の調査地点よりも南側の調査で、西7道路を検出している。それらの調査では、最も古い時期が10世紀前葉以前、それ以降は2期あり、10世紀前葉以降と考えられている。

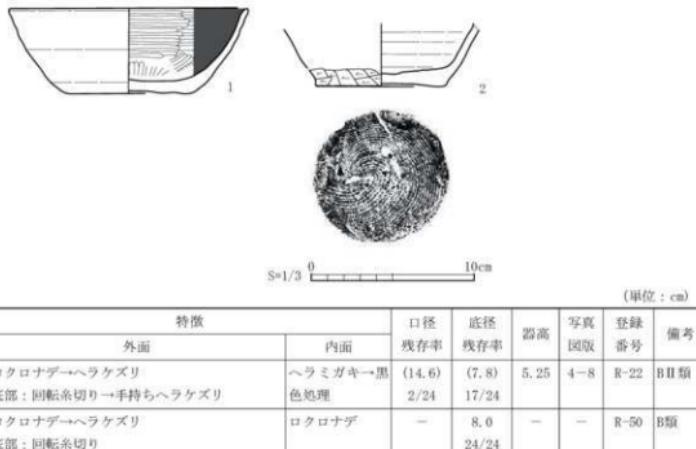
今回の調査では、土層の堆積状況から両道路とも5時期の変遷が考えられる。年代を推定するにあたって、A期の遺物をみる。A期の西7道路の側溝からの遺物は、1点のみ図示したのであるが、V類の須恵器壺が出土している。東西大路南1間道路の同期の遺物をみても、土師器壺（B II類）や須恵器壺（V類）が出土しており、土師器壺（B II類）の出土が多く、BV類がそれに続くもので9世紀中頃である。これらの遺物が出土する層は、10世紀前葉頃の、灰白色火山灰降灰以前であることから、A期は9世紀中頃以降ということがわかる。今回の調査地点からは9世紀中葉の遺物が出土しているので、9世紀後半にこの



第26図 S X 2717小溝群 平面図・断面図



第27図 Pit 1・SK2741・SK2742・SK2743 平面図・断面図



第28図 確認面出土遺物

地点の西7道路と東西大路南1間道路が機能し始めたと考えられる。つまり、A期は9世紀後半、B期以降は10世紀前葉以降ということができる。

さらに、第23次調査において、SD2714から多賀城地割廃絶時の黒色粘土層から土師器坏が出土している（第22図）。この土器と同じ形式のものが多賀城跡第61次調査の7層から出土しており、10世紀中葉の年代観が与えられている。のことから、多賀城南面の地割は、10世紀中葉以降廃絶した可能性がある。

西7道路と東西大路南1間道路の交差点を調査したのだが、西7道路から西へ向かう東西大路南1間道路を確認することができたが、東へ向かう道路跡は発見することができなかった。この地点から東へ向かう東西大路南1間道路が、今回の調査区の外にあるのか、もともとないのかは、これから課題である。

今回の調査地点からは、掘立柱建物跡などは発見されず、小溝群を確認している。西7道路は標高3m20cmほどのところで、遺構確認している。この調査のすぐ南の地点で南1道路が検出されているが（第209次調査）、標高3m70cmほどのところで検出している。のことから、他の地点よりも低地であるため、居住域には適していなかったと考えられる。

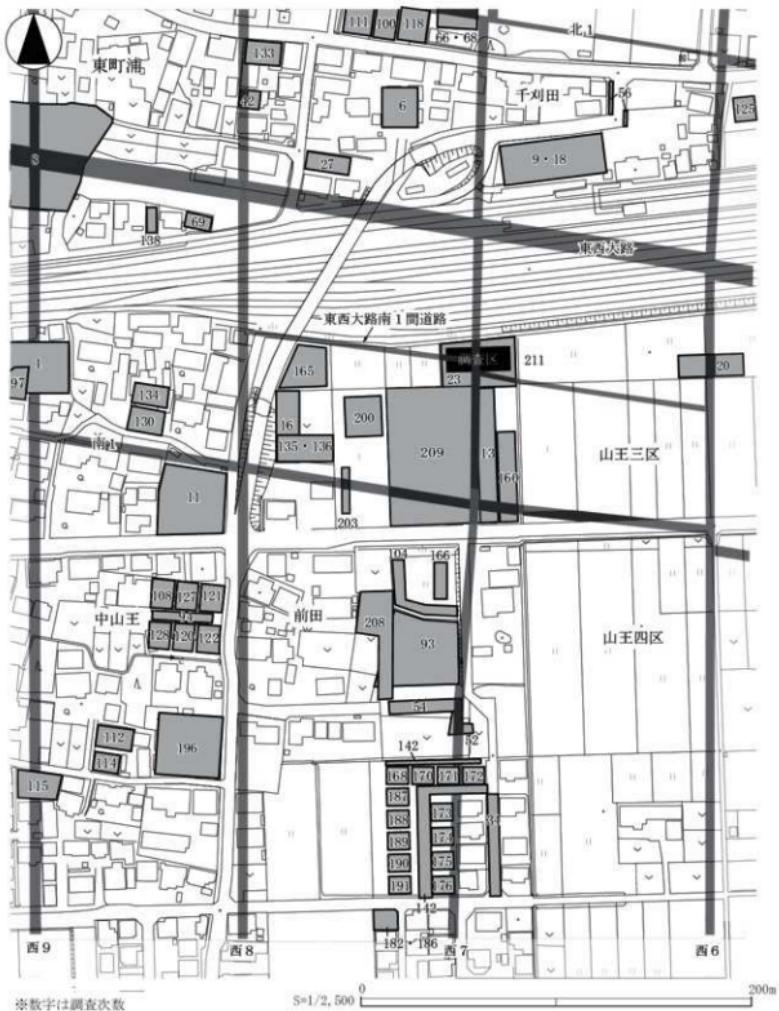
参考文献

多賀城市教育委員会『山王遺跡-第51・54・57次調査報告書-』多賀城市文化財報告書第81集 2006

多賀城市教育委員会『山王遺跡-第66・68次調査報告書-』多賀城市文化財報告書第100集 2010

多賀城市教育委員会『多賀城市内の道路2-平成28年度ほか発掘調査報告書-』多賀城市文化財報告書第132集 2017

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』1992



第29図 第211次調査区と周辺の調査区



1 III層上面全景（上が北）



2 東西大路南 1 間道路跡・西 7 道路跡（南から）



3 西 7 道路跡（南から）



4 東西大路南 1 間道路跡（西から）



5 S X 2720 小溝群（東から）

写真図版 1



1 II層上面全景（上が北）



2 II層上面遺構検出状況（南から）



3 東西大路南1間道路跡・西7道路跡（南から）



4 西7道路跡（南から）



5 東西大路南1間道路跡（西から）

写真図版 2



1 西7道路跡断面図（南西から）



2 SD2710遺物出土状況（南から）



3 SD2712遺物出土状況（東から）



4 施釉陶器・須恵器



5 SD2709a 北側溝出土 土師器坏 (R 1)



6 SD2709a 北側溝出土 土師器坏 (R 2)



7 SD2709a 北側溝出土 土師器坏 (R 3)



8 SD2709a 北側溝出土 土師器坏 (R 24)

写真図版 3



1 S D2709 a 北側溝出土 土師器壺 (R 7)



2 S D2710 南側溝出土 土師器壺 (R 28)



3 S D2710 b 南側溝出土 土師器壺 (R 27)



4 S D2710 a 南側溝出土 須恵器壺 (R 33)



5 S D2710 a 南側溝出土 須恵器壺 (R 34)



6 S D2712 a 西側溝出土 須恵器壺 (R 40)



7 S D2712 c 西側溝出土 須恵系土器壺 (R 20)



8 検出面出土 土師器壺 (R 22)

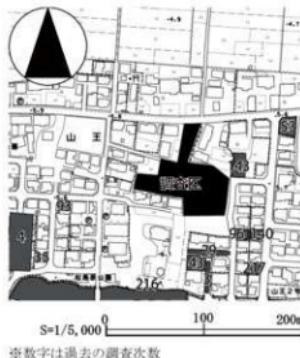
IV 山王遺跡第213次調査

1 調査に至る経緯と経過

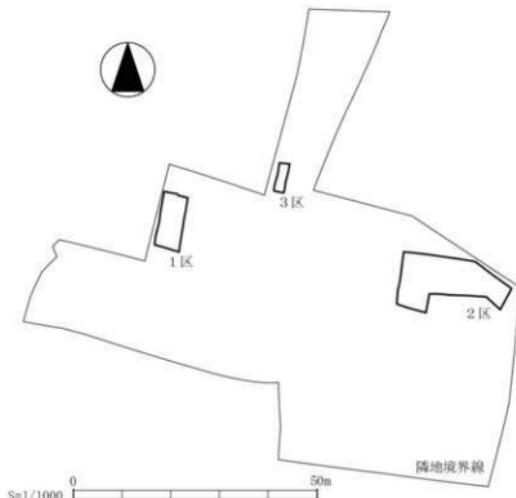
本件は、山王字西町浦と北寿福寺及び南宮字町地内における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。

平成30年8月3日、事業者より当該地での宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、開発面積4,335.20m²の敷地に幅6mの道路と15区画の宅地及び公園を造成する内容であった。当該地は、多賀城南面に施工された古代の道路網のうち、基幹道路である東西大路の推定線上に位置しており、特に当該地の東側隣接地で平成26年度に実施した第143次調査（多賀城市教育委員会 2015）では、東西大路の南側構を確認している。このことから、道路位置や状況を把握するため、事業計画者及び地権者から平成30年11月14日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成30年12月3日から12月21日まで確認調査（山王遺跡第205次調査）を実施した（多賀城市教育委員会 2019）。その結果、遺構と河川跡が確認され、さらに東西大路の位置や状況を把握する必要が生じたため、令和元年6月12日に調査依頼者と委託契約を取り交わし、令和元年6月19日より本発掘調査に着手した。

調査区は第205次調査に対し北及び東方向に重点を置いて3箇所設定し、西側を1区、東側を2区、北側を3区とした。重機で各調査区の表土を除去し、IV層上面で遺構の検出作業を行った。1区では、先の調査で構跡として確認された東西方向に帯状に延びる黒褐色の輪郭を今回も検出した。そこで、排水及び遺構観察のための側溝を掘り調査区の土層を観察したところ、古代の基盤層である黄褐色



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

土(IV層)の上面に自然の營力によって形成されたと考えられる凹凸があることがわかった。黒褐色の輪郭が認められた地点についても黄褐色土(IV層)上面が周囲よりも若干低くなるところに黒褐色土(III層)が堆積している状況で、人為的に掘削された様相は認められなかつたため、遺構ではないとの判断をした。遺物は発見されなかつた。2区でも遺構検出作業を行つたが、現代の水田耕作土から掘り込まれた素掘りの井戸跡が見つかったが、遺跡にかかわる遺構・遺物は発見されなかつた。3区も遺跡にかかわる遺構・遺物は発見されなかつた。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は7月22日に終えた。25・26日に埋戻しを行い、機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。

今回の調査及び第205次調査は、東西大路が確認された第143次調査の西方向に当たるもの、その延長線は検出されなかつた。

2 調査成果

(1) 層序

〔1区〕

I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは約70cmである。

I 2層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約20cmである。

II層：黒褐色(10YR3/2)土である。酸化鉄・IV層土小ブロックを含む。厚さは約5cmである。

III層：黒色(10YR2/1)粘土である。厚さは5~10cmである。

IV層：黄褐色(2.5Y5/3)土である。IV層直上で部分的に灰白色火山灰が堆積している。

〔2区〕

I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは約20cmである。

I 2層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約60cmである。

II層：黒褐色(2.5Y3/1)粘土である。III層土小ブロックを含む。厚さは約5cmである。

III層：にぶい黄色(2.5Y6/3)土である。厚さは5cmである。

IV層：灰黄色(2.5Y6/2)土である。IV層直上で部分的に灰白色火山灰が堆積している。

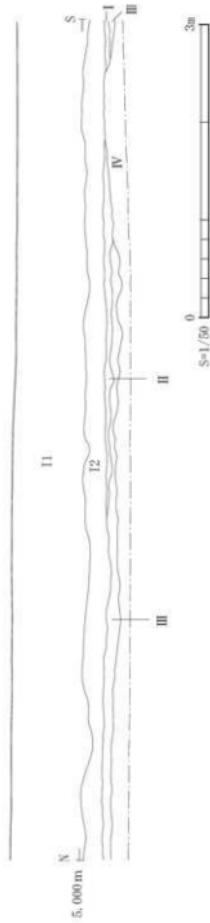
〔3区〕

I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは約35cmである。

I 2層：灰色(10Y6/1)粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約28cmである。

I 3層：灰色(7.5Y6/1)粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約17cmである。

IV層：緑灰色(7.5GY6/1)土である。



第3図 1区西壁断面図

引用文献

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2—平成26年度発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第119集 2015

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2—平成30年度ほか発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第143集 2019



1区全景（東から）



1区東壁断面（西から）



2区全景（西から）



3区全景（西から）

V 大日南遺跡第15次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高橋字大日北地内における変電所新設等工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成30年9月20日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、変電所設備の撤去・新設、管路新設に際し、12か所に直径35cmの杭を深さ11mまで打ち込むものと、開削管路工事において幅1.2m、深さ1.4m～8.3mの掘削を行う内容であった。当該事業地内では平成11年度に第4次、第5次調査を実施しており、当時の地表面から約1.5mで中世の掘立柱建物跡や溝跡等を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。上記の計画内容から、工法変更による遺跡の保存は難しいと判断されたため、当初計画のとおり施工するとの結論に至った。その後、平成31年3月19日に事業者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、4月12日より発掘調査を実施した。

調査では、第4次、第5次調査終了後に盛土がされていることから、現地表面から2.7mの深さまで重機により掘削を行ったが、碎石を多く含む現代の盛土層が厚く堆積しており、遺構・遺物を発見することはできなかった。

以上から、計画地内に第4次、第5次調査で検出された中世の遺構面はもはや存在しないものと判断し、4月18日に写真撮影及び調査位置の記録を行い、現地調査をすべて終了した。



調査状況（南から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

報告書抄録

ふりがな	さんのういせきほか									
書名	山王遺跡ほか									
副書名	山王遺跡第206次調査 山王遺跡第211次調査 山王遺跡第213次調査 大日南遺跡第15次調査									
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書									
シリーズ番号	第145集									
編著者名	大木丈夫 赤澤靖章 杉山祐一 佐藤純平									
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター									
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134									
発行年月日	西暦2020年3月27日									
所収遺跡	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
山王遺跡 (第206次)	宮城県多賀城市南宮字伊勢70番外 11筆	市町村	遺跡番号	042099	18013	38度30分27秒	140度97分40秒	20190305 ~ 20190307	125m ²	機械化センター建設
山王遺跡 (第211次)	宮城県多賀城市山王字山王三区45番1外 6筆	市町村	遺跡番号	042099	18013	38度29分87秒	140度97分82秒	20190617 ~ 20191128	435m ²	集合住宅新築工事
山王遺跡 (第213次)	宮城県多賀城市山王字西浦町10番 6外	市町村	遺跡番号	042099	18013	38度30分5秒	140度96分82秒	20190619 ~ 20190725	225m ²	宅地造成
大日南遺跡 (第15次)	宮城県多賀城市高橋字大日北110番4外	市町村	遺跡番号	042099	18004	38度29分10秒	140度98分1秒	20190412 ~ 20190418	125m ²	変電所設備新設工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項				
山王遺跡 (第206次)	集落・都市	古墳、古代、中世	溝跡							
山王遺跡 (第211次)	集落・都市	古墳、古代、中世	道路跡、溝跡	土師器、須恵器、墨書き土器、施釉陶器		東西大路と南北1道路の間の道路と、南北大路に並行する西に7つ目の道路の交差点を発見した。				
山王遺跡 (第213次)	集落・都市	古墳、古代、中世								
大日南遺跡 (第15次)	屋敷群	中世								
要約	山王遺跡第206次調査では、古代の溝跡を確認した。									
	山王遺跡第211次調査では、東西大路と南北1道路の間の道路と、南北大路に並行する西に7つ目の道路を発見し、その交差点を発見した。									
	山王遺跡第213次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。									
	大日南遺跡第15次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。									

多賀城市文化財調査報告書第145集

山王遺跡ほか

令和2年3月27日発行

発行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷 株式会社 工陽社
宮城県塩竈市尾島町8番5号
電話（022）365-1151
